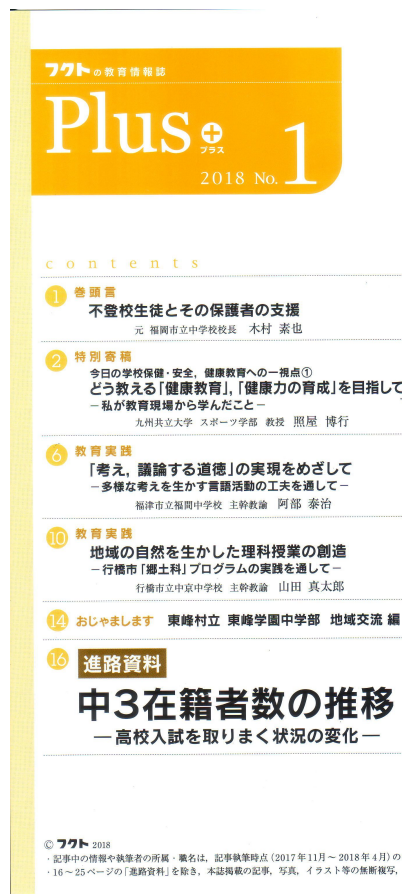


フクトの教育情報誌 Plus の 2018 年度 No. 1 号の「巻頭言」に寄稿文を載せましたので紹介します。（2018 年 5 月 14 日号）

株式会社フクトは、毎年約 10 万人の中学生が受験する福岡最大規模の公開実力テスト会の運営をはじめ、福岡県の中学校で主に利用される副教材の制作・発行を行っており、「中学生の夢を応援する会社」です。教育情報誌 Plus は福岡県内約 45,000 人の中学 3 年生全員や各中学校・教育関係者などに配布される、広く知られている情報誌です。



不登校生徒とその保護者の支援

元 福岡市立中学校校長 木村 素也

教職の傍ら、20年近く前から「学校生活に困り感を持つ子ども達やその保護者」の支援を続けてきました。最近、以前にも増して学校に馴染めない子ども達が増えてきたように思います。「不登校生」のほとんどが「学校に行きたくても行けない生徒」である実態が未だに十分理解されず、相変わらず「怠けている」とか「さぼりだ」と思われています。そのため不登校生の自己肯定感は低く、ますます学校に行きにくくなっています。不登校児童生徒への支援は、学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指すことが必要であると考えています。

学校に行かないことは、学校生活の中での高ストレスの状態から回復するための休養時間としての意味や、進路選択を考える上で自分を見つめ直す等の積極的な意味を持たせることが大切です。しかし、同時に、現実の問題として、不登校による学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することは否めません。このことに配慮し、不登校によっておこる課題や不安・ストレスから解放してあげることが「不登校」という問題の解決の近道です。そして、その子どもをもっとも身近で支えている保護者に正確な情報を伝え、しっかり支える環境を提供するためにも「保護者の会」の存在は重要です。私はこの観点から「保護者の会」の活動を行ってきました。

学校・保護者や周囲の大人が「不登校」の本質を理解できたら、「不登校生」に対する対応も変わり、適切な進路情報と自尊感情を高めることに配慮があれば、これほど「不登校生」は苦しまず、自分の将来に対し必要な努力に取り組むことがで

きるはずです。

「靴に合わない足を無理矢理合わせようとするより、足に合う靴をつくる—無理に学校に子どもを合わせるより、まずは子どもに合わせた学校運営をおこなう」すべてではなくてもそんな学校もあっても良いのではないのでしょうか。そんな考えの基に、公教育の範囲でできる限り弾力的な学校運営ができると良いと思います。しかし現実には、公教育の名の下、みんな同じような目標を持ち、同一のベクトルを目指す教育では、その教育の流れに合わない子ども達は枠の外に出てしまいます。たとえそうでなくとも、余裕のない中でのストレスに耐えきれず、適応不良を起こす生徒がいるのが現状です。枠の外に出て行くのは本人の自己責任と言われかねませんが、無理矢理枠の外に追いやられている側面も否定できません。私たちはその様な子ども達にもしっかり向き合わなければなりません。

本当の意味での公教育は、すべての生徒にその教育を受ける場と学習権を保障することです。平成28年12月に成立した教育機会確保法では「個々の不登校児童生徒の休養の必要性」を認め、「不登校はどの児童生徒にも起こり得るものである」「不登校は当該児童生徒に起因するものと受け取らない」「不登校というだけで問題行動であると受け取らない」など配慮事項が記されました。

「学校生活に困り感を持つ子ども達やその保護者」の支援は、一般的な学校教育の場から一時的に離れてしまった子ども達をしっかりと支え、社会の中で自立していく力をつける活動として重要な意味を持っています。

(現 不登校生保護者の会「ぼちぼちの会」会長)